【原稿】第４６回全国同和教育研究大会徳島大会特別報告　＜１９９４年１１月２８日（土）＞

「峠を越えて」　　－ 全体学習・輝ける日々 －

1　同和教育への目覚め～私を変えた全体学習への取り組み～

「Ｙ子ちゃんは部落？」って聞かれたとき、私は部落と思われるの嫌だから、一生懸命違うと言った。
　それだけじゃなくて、そのことをきちっと示すために、同じ小学校から入学してきた友達を私は裏切りました。
「○○ちゃんがそうよ。○○ちゃんもそうよ。」と言った。
　その子は「あの子がそう。そういうふうに見えんなあ。」と言いました。

板野中学校は、徳島県の北東部にあり、吉野川下流の低地に位置している。全校生徒５４０余名で、２８％が部落の生徒たちである。校区にはＨ、Ｍ、Ｎの３つの小学校があり、Ｈ、Ｍには部落があるが、Ｎにはない。

私は１９９０年、板野中学校に赴任した。その年、２年Ｂ組を担任した。学級開きの日から、私は同和教育に寄せるさまざまな思いや願いを生徒たちに語っていく。私の思いを聞いた生徒たちは、それぞれの思いを返してきた。

４月後半に入った頃、私はクラスの生徒たちに将来、進学したり社会へ出たとき、自分が部落の人間でないことを示すため、共に中学校で部落問題学習に取り組んできた仲間を「○○さんが部落の人間なんだ」と言って、自分が部落でないことを示していく、そんな関係であってほしくないと訴えた。私の訴えに対して一人の生徒がその思いを生活記録に綴ってきた。

《私は先生が言うように、実は友達を裏切りました。板野中学に入学してきたとき、Ｎ小学校から来た友達は、Ｎ小学校には部落がなかったので、Ｍ小学校からきた私たちに、何か特別な感情を持っていたと思います。

私はＮ小学校から来た友達と仲よくなった。そのときにその子に言われた。

「Ｙ子ちゃんは部落？」って‥‥。

私はそのときに部落と思われるの嫌だから、一生懸命違うと言った。それだけじゃなくて、そのことをきちっと示すために、同じＭ小学校からきた友達を私は裏切りました。

「○○ちゃんがそうよ。○○ちゃんもそうよ。」と言った。

その子は「えっ！あの子がそう。そういうふうに見えんなあ。」と言いました。》

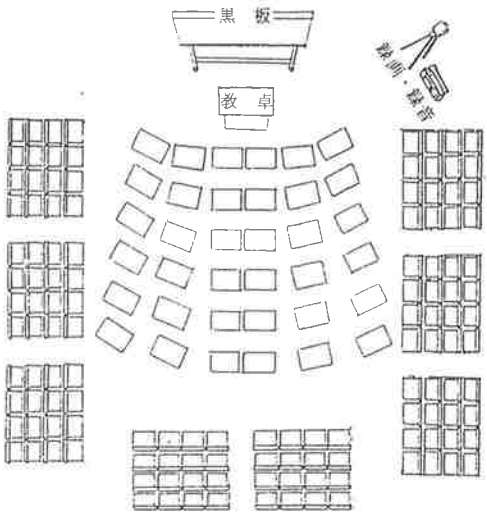
この生活記録は私に部落差別の現実を突きつけるものとなった。中学入学当時から部落差別の中で生徒たちが喘ぎ、その中で生徒同士が傷つけ合っている。この生徒たちは今、中学２年生としてそれぞれのクラスでどんな思いで、部落問題学習を積み上げているのだろうか。部落差別の現実を見据えたとき、１つのクラスだけがいかに頑張っても、１人の教師だけがいかに取り組んでも、それは確かなものになっていかないと思った。私はこの現実を乗り越えて、この生徒たちを部落差別から解放していきたいと思った。この問題を学年主任を中心に話し合った。

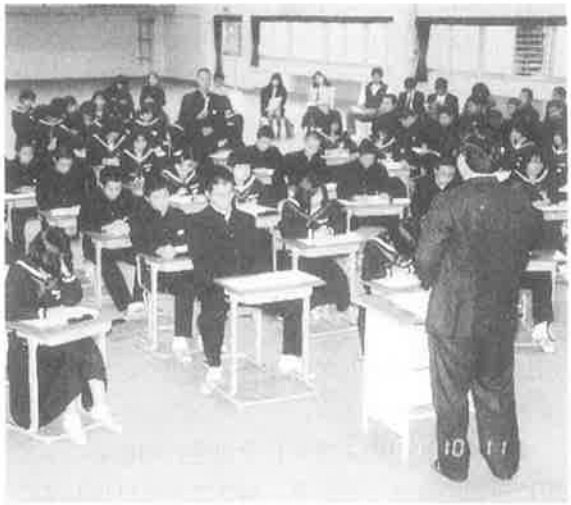
その話し合いの中で、生徒の発言の活発化を図るための学習オリエンテーションの形態に、部

落問題学習を重ねてみようということになった。最初の時間、１つのクラスが思いを込めて部落問題学習をし、その授業を他のすべてのクラスが参観する。そして、次の時間に学年全体で部落問題に寄せる思いを語り合う。そんな授業を学年全体でつくっていこうということで、全体学習という取り組みが始まった。

この取り組みは、ゆとりの時間を木曜日の５時間目・６時間目に設定し、体育館中央に教室を移動した１つのクラスが五時間目に公開授業を行い、６時間目に授業を公開したクラスを含めて学年全体で部落問題について話し合っていく。また６時間目の授業ではすべての教師が部落問題学習に取り組む１人として発言する。この５時間目の公開授業及び６時間目の学年全体での授業（全体授業）を合わせた２時間続きの授業を全体学習と呼ぶようになった。

【体育館における全体学習の隊形】





全体学習のようす　1991年10月11日

この学習に取り組む私たち教師の中には、研究授業ですら重たいのに、どうしてそこまでしなければならないのかという反発もあった。しかし「とにかく実践を」という合言葉のもと、この取り組みがスタートした。

１９９０年５月、私のクラス２年Ｂ組が「渋染一揆」の授業をした。すかさず、六月にＣ組が「夕やけがうつくしい」という資料に取り組んだ。それらの授業の中で私たち教師が当初予想もしなかった高まりが生まれていき、生徒の願いから全体学習は２回、３回と積み重ねられていった。当時、２年生は５クラスであったが、生徒たちの高まりから、いつしかすべてのクラスが一回は公開授業をしようということになった。

１２月、４回目の全体学習、Ｄ組が取り組んだのは、「私の目をみて！」という作品だった。この授業は、部落の生徒たちを大きく揺さぶっていった。

Ｄ組にＫ子という生徒がいた。Ｋ子はその朝、担任に自分の揺れる思いを手紙にして手渡した。その手紙は私たち教師集団に大きな衝撃を与える。

《私、部落問題の授業をしているときが一番つらい思いをします。クラスの全員が私の方を見ているような気がします。また、思うことなんだけど、みんなは心の中で「自分は部落出身でなく

てよかった」と思っていると思います。

私だって中学１年のときは他人事のように思っていました。でも、自分が部落出身だったと気づいたときは悲しかった。そして、とてもつらくて心の中では、これから隠していこうとさえ思いました。これが差別意識なんですよね。私みたいに考えている子がいるから差別がなくならないんです。》

この手紙が、私の心に重くのしかかった状態で全体学習が始まる。Ｄ組の公開授業、Ｋ子は資料「私の目をみて！」に寄せて、健気にも繰り返し繰り返し発言をしていく。私はＫ子が発言する度に、「それはおまえの本当の気持ちではないだろう」とつぶやいていた。そして、次の時間の全体授業では、今まで以上に生徒たちの本音が次から次へと語られていった。その授業の最後のところでＫ子が手を挙げた。私はＫ子を指名した。Ｋ子は何かを言おうとする。

「こんなこと言ったら怒られるかもしれない……。」

Ｋ子は語り出すが、その後は全く言葉にならない。言葉がでない。Ｋ子の目に涙があふれてくる。やりきれない思いで私はＫ子の姿を見つめていた。しばらくの沈黙の後、絞り出すように

「私は差別があると先生から教えられた……。それは先生たちが……。」と語り、最後にほとんど声にならない言葉で、「部落出身……」ということをポツッとつぶやく。Ｋ子の涙が最後の発言となった。

私はたまらない気持ちでＫ子とＫ子を見つめる生徒たちの前に立っていた。私は必死に言葉をつなげた。

《今のＫ子さんの心の声がどれだけみんなに届いただろうか。本当の仲間になっていく、そんな部落問題の学習をしていきたいと思う。人間は、他人のこと、遠くのことに対しては、美しい言葉を吐くこともできる。

でも、近くの出来事や自分自身の問題になってくると、あれほど美しい言葉を吐いた人が、見事に差別者になっていき、醜さをさらけ出していく。そんな悲しい現実がいっぱいある。私たちはそれぞれが持っている本当の思いを出し合える関係でありたい。その思いをお互いが大事にし合い、共に励まし支え合いながら生きていく絆で結ばれたい。この問題を自分自身の生き方の問題としてとらえ、許さない、許せないんだという生き方をこれからも学習していきたい。涙を流す仲間がいない、今日も学校へきてよかったと思える教室でありたい。そのために、自分はこの問題にかかわってどう生きるのかを語り合っていきたいと思う。》

私の精一杯の思いだった。私はこのとき、私たち教師が一番しんどいところに立たないで、どうして部落差別の中で揺れている生徒たちが頑張っていけるだろうか、また、教師が心の底にある本当の思いを語っていかないで、どうして生徒たちが本当の思いを語れるだろうかと思った。

私はその翌日、教師になって初めて部落出身である自分の思いをクラスの生徒たちに語った。今まで私が部落出身の教師であるということは、授業の一場面で語ったことはあった。しかし、まるまる１時間このことを語ったのは初めてだった。

部落出身であることを初めて知った中学時代。部落差別におびえ揺れ続け、故郷をすてることばかりを考えた高校の頃、そんな思いの中で過ごした京都での大学時代。教師になって頑張ろうとしたけど頑張りきれなかった思い。そんな思いを生徒たちにぶつけていった。その授業が私の目覚めであったし、自分を解放していくスタートであった。この授業に寄せて綴られた生活記録は、部落差別がすべての生徒たちの上にのしかかっている現実を私に訴えていた。

《今日の授業、胸がいっぱいになって涙が出てきた。今までにない悲しさ、腹立ちがこみ上げて

きました。こんなに真剣になれた授業は、本当に初めてでした。先生はすごいと思う。

おじいちゃんと初めて部落問題について話をしました。K地区のHという地域が部落だそうです。実は私の住所はK字Hです。私はびっくりしました。そのとき「嫌だ！」って思いました。おじいちゃんから私の家は部落に入っていないって聞いたときは、ものすごくホッとした。それでハッとした。先生の話を聞いていると、涙が出て、腹が立ってくるのに、自分のこととなると嫌だって思うんです。ものすごく都合のいい心だなあと思いました。

差別があることに気づかないのは、自分自身の中にある差別意識に気づいていないからだと思います。》

この授業は、私自身にとって大切な授業として心の中に生き続けている。そして、この授業から私の部落問題学習への取り組みはまったく違うものになっていく。すべての教育活動に私自身の生き方をぶつけていく。それが一人一人の生徒の立ち上がりを生んでいき、その生徒たちのひたむきな頑張りが教師一人一人の生き方を大きく揺さぶっていった。私はその営みの中で私自身の差別意識と闘い続けてきたように思う。

その翌年３年生になった生徒たちは、当初やはり涙を引きずっていた。そんな生徒たちの目覚めにつながった授業として、「ふるさと」の詩について学習した６月の板野郡同和教育研究大会の公開授業をあげることができる。それまでの学習会や部落問題学習の不十分さから、自らの社会的立場を自覚していなかったN夫とT子は、中学３年の家庭訪問で初めて部落出身である自分の立場を自覚した。N夫は仲間の発言につなげて、初めて部落出身であることを知った思いを次のように語った。

《僕も部落の人間です。今までこのクラスにもそのことをわかってくれる友達はいないと思っていたけど、「みんないいなあ」と思いました。森口先生に家庭訪問の時に「お前も部落の人間なんだ」と言われたとき、自分には差別意識がないと思っていたけど、実際はありました。それで、この授業では泣かないと思っていたけど泣いてしまいました。

これからこれをバネとして部落解放の道に進んでいって、気軽に部落の人間と言えるような社会をつくっていきたいです。》

N夫はこの日を境にたくましい歩みを続けることになる。現在、「高校生友の会」の中心メンバーとして、高校での同和教育や「友の会」活動に自らの生きざまをぶつけて頑張っている。

家庭訪問で悲しみの涙を流したT子も、仲間の立ち上がりに応えて語った。

《私も部落出身ですが、このクラスのみんなだったらこのことが言えると思います。この前友達に自分が部落出身ということを打ち明けたら‥‥、「ほんなん関係ないでえ」と言ってくれました‥‥。私は本当の友達がいたんだということがわかったのでよかったなあと思いました。》

この発言の中で涙を流したT子であったが、この授業を通してT子は確かな一歩を歩み出す。その思いを次のように綴っている。

《私は今日の発言で部落のことが恥ずかしくなくなりました。もう何のこだわりもありません。発表している時は自分で何を言っているのかわからず、涙が出てきたけれど、SさんやJさんが発表したのに、私だけ黙っとってはいけないなあと思っていたんです。そしたら、自然と手が挙がったのが不思議でした。心臓はドッキンドッキンと破裂しそうだったけど。私の発言の後、Kさん、Oさんたちが言ってくれて、発表してよかったと思いました。

泣くのは今日で終わりにします。M君とか、Tさんとかもみんなの差別に負けた涙は見たくないと言っていたし‥‥。今日の授業で私は多くの人に支えられているなあと実感しました。みん

な信じ合える仲間です。

板野に生まれたこと、部落に生まれたこと、まだまだ不安とかがあるけど、私は強い人間になりたいです。「歎くより怒ることだ」を胸に刻んで‥‥。今日で新しい道が開けたような気がします。今まで「学習会の通知やもらいたあない」と歎いていた自分がばからしくなりました。これからも学習会に参加していきたいし、どんどん学習していきたいです。

いつか絶対差別がなくなっていると思います。とにかく、今日の授業、忘れられない一日になりそうです。うれしかった。よかった。ビデオを貸してください。》

その授業は私の友人がビデオに撮っていた。Ｔ子はそのビデオが見たいという。二週間後に実施された三者面談の時母親が語った。

「先生、Ｔ子の発表するところ一緒に何度も何度も見たんです。人間は強くなれるんですね。」

Ｔ子はこの授業のことや家庭訪問のことを１１月に行なわれた徳島県中学校同和教育研究大会の公開授業で次のように語っている。

《私は家庭訪問のときに先生から初めて、自分が部落出身であることを聞かされて思いきり泣いてしまいました。それでも板野郡同和教育研究大会のときは、自分の本当の気持ちをみんなにぶつけることができました。でもそのときはなぜか悲しくて泣いてしまいました。今はもうそんな悲しみや苦しみとかはなくて、この授業でも涙なんか流さずに発表できるようになりました。

そんな泣いていた私を変えてくれたのは、私の友達の励ましや支えがあったのと、友達を心から信頼できたからです。私はそんな友達に感謝しています。》

また、１年前の４回目の全体学習で涙を流していたＫ子が、この公開授業で語った思いは、私たちの姿勢を今も問い続けている。

《中学２年の時から今までの全体学習で、自分が変わっていったのが、目に見えるように自分でわかります。私は自分を隠し続けることの恥ずかしさを知りました。中学２年の時の最初の全体学習の時は、他のクラスの授業を見ているだけでも、何か逃げ出したい気持ちでいっぱいでした。本当に部落出身という自分が嫌でした。友達にも隠し続けていこうと思っていたけど、先生の熱心さに引き付けられていったと思います。

今、初めてずっと思っていたことを言うんだけど、今まで担任してくれた先生は、口先だけで「差別はいけない」と言っているのだと思っていました。でも先生はただ口先だけで言っているのではなく、本当に心から言っているのがわかりました。だから学年全体での部落問題学習が、だんだん真剣に取り組めるようになってきたんだと思います。》

Ｋ子の思いは、部落の生徒だけの思いではない。Ｋ子たちを始めとする多くの生徒たちの思いである。

全体学習の取り組みは教師一人一人の生きざまをさらけ出し、本気で生徒と向き合う中からより確かなものになってきた。

2　本当の思いを語り合うことの喜び　～自らの解放を求めて～

当初、私たちの意識の中に、中学生にもなれば自分の気持ちを発言すること、ましてや本心を語ることはないという意識があった。しかし、この全体学習という取り組みによって、生徒の本当の思いは語られていくようになった。

全体学習に取り組むまでの授業は、私たち教師自身が、その本心を生徒たちに語り切れていな

かった。だから、生徒たちも本当の思いをクラスの仲間に語ることがなかったのだと思う。

生徒たちは空気を吸うがごとく差別を吸収し、その中で苦しみ揺れている。しかし、同和教育の中身はそんな現実を乗り越えていくものにはなっていなかった。

それは差別意識を植えつけられてきた私たち教師が、同和教育への研究も研修も不十分なままで教壇に立ち、自分の学級だけでその表面的な価値観を押しつけてきた授業であり、自らの差別意識をごまかした教師が「差別はいけません」と言い聞かせやお説教をしてきた授業であった。また、その授業の大半は、部落差別の現実が示された資料を読んで、感想を言わせるだけの授業であり、決まり切ったことしか語れない状況でしらけきった生徒たちに、感想を書かせて終わっていた。そこには自らの内面にある差別意識をごまかして、教師に評価される内容をひたすら書き続けた生徒の姿があった。

そんな取り組みが本音と建て前をうまく使い分け、部落に生まれたことを悲しくつらいこととしかとらえられず、部落の人たちに対する同情心のみをかりたててきた。そして、その中で息をひそめ、顔さえあげることができない部落の生徒たちは、無気力にさせられてきた。板野中学校では、このような授業の現実を「密室の同和教育」と分析した。全体学習はこのような現実を乗り越えるための実践であったように思う。

徳島県中学校同和教育研究大会の公開授業で、M夫が参観の先生方に訴えるように語った言葉は、そんな同和教育のあり方を問いただしていく発言として心に残っている。その発言は次のようなものだった。

《涙を流すことではなく、自分が部落に生まれたということを誇りに思うことによって、部落問題学習は人間としての喜びをつかんでいくことができるし、より人間としてすばらしい生き方を求めて頑張ることができると思います。

僕は中学に入学して、自分自身が部落に生まれたと知ったときものすごいショックが心の中に沸き起こってきました。それはそれまでに部落のことなんかを小学校の高学年頃から教えられていたけど、部落の悪いイメージだけしか心の中になくて、とにかく部落というところは差別されて惨めなものとしか授業で教えてもらってなかったから、あんなショックがあったんだと思うんです。

今考えてみると部落に対するマイナスのイメージしか教えてもらわなかったからそうなったと思うんです。でも今はマイナスをプラスに変えるというか、自分をより大きく成長させていくことを全体学習やクラスでの部落問題学習で教えてもらっているように思います。僕たちが続けてきたような本心を語り合う学習を昔から続けていたら、部落差別というものはもっと小さいものになっていたと思うんです。

ただ時間をこなすうわべだけの授業だったら、絶対この先いくら部落問題の授業をやっていっても、やったというだけで生徒の中には部落問題を部落という惨めなところに生まれた人の問題としてしかとらえられない授業となって、本当の意味で差別をなくしていく授業にはならないと思うんです。僕たちが中学２年からやってきた本音の部落問題学習をこれから先も大切にして、この取り組みをすべての学校での取り組みにしていくことが、部落差別をなくしていくことにつながっていくと思います。》

私たちはお互いの授業を公開し合うことによって、生徒の心を揺さぶり切れていなかった現実を乗り越え、切磋琢磨しながら本物の授業を目指していった。そこにはごまかしがない。本気で生徒と向き合う教師の姿が生まれていく。この全体学習という取り組みは、部落問題学習が私た

ち教師にとって「教える」ことではなく、教師自身が本音を語り、自己の差別意識を洗っていくという自分自身の問題であることを自覚させていった。

また、全体学習の取り組みは、学級という枠を超え、同じ学年の生徒一人一人を部落解放に向けて生きるかけがえのない仲間としてつないでいった。そして、教師にとっても、生徒にとっても、自分のクラスの高まりだけでなく、他のクラスの高まりがこの上ない喜びとなっていく。人間には自分さえよければという意識がある。それが自分のクラスさえよければという意識となって、学年全体の高まりには至っていなかった。しかし、全体学習はその意識を超えて、教師と生徒、生徒一人一人をつないでいき、教師集団がかけがえのない仲間となり、信頼関係が培われてきた。そのことによって教師自らが、生徒一人一人にその生い立ちや部落との出会い、差別とのかかわりを語っていく状況を生んできた。そして何より、この営みが土台にあってこそ、部落問題学習は確かな方向性を持ってきた。

私たち教師集団は、私たちの生き方を生徒たちにさらしながら、生徒と共に自らの差別意識と闘い続けてきた。その中で私たちの思いは、日々熱いものになってきた。

特に公開授業の後、学年全体で実施している全体授業では、授業者以外の教師も生徒の思いにつなげて、その本心を語っていった。その全体授業の中で差別とのかかわりを語った教師の発言である。

《私の弟は耳が聞こえません。補聴器をかけたらやっと聞こえます。今までそんな状況で頑張っている弟と、どうかかわってきたのかと自分の中で考えたら、ずっとそのことを人に知られるのが嫌でした。私には弟と妹がいるんですけど、妹のことは何のこだわりもなく言えるのに、弟のことはなかなか言えません。自分の実の弟のことがみんなの前でしゃべれません。そんな自分でした。

それがこの学習をしていく中で、板野中学校の全体学習に取り組んでいく中で、部落問題を真剣に考える自分ができました。その学習の中で私は、やっと自分の弟に対する気持ちというのがはっきりとわかってきました。

自分の中にある弟、極端な言い方をするけど、家族の中だったら気軽に話ができるのに、いざ外で家から出て弟のことが話に出ると、自分の弟でないような、自分には全く関係ないような素振りをしてしまう。そんな自分がすごく恥ずかしいと思えてきた。本当に情けないと思うようになった。実の弟のことさえそんな目で見る自分が、ものすごく恥ずかしくなってきたんです。

私の部落問題学習というのは、自分と弟とのかかわりだと思うし、私はそんな自分を変えていくために、自分自身のために部落問題学習をしていきたいと思います。》

彼は全同教大会の前日に実施した全体学習の指導案（主題設定の理由）の中に次のような思いを綴っている。

《私にはかけがえのない弟がいる。弟は小さい時の予防接種で引きつけを起こし、それ以来、耳がほとんど聞こえない。だから補聴器を付けて生活している。スポーツが好きで、中学校、高校とずうっと陸上をしていた。運動能力はそれほど高くはないのだがこつこつ努力するタイプで、毎日毎日家の周りを走っていた。定時制高校へ進学し、全国大会にまで出場するようになった。私の育った美馬郡は町対抗の駅伝大会があるのだが、その美馬町代表選手として出場した。駅伝大会当日には弟の走る区間に応援に行った。他の町村の選手が何人か走り抜けて行くのだが、弟の姿がなかなか見えなくて、やきもきした気持ちで、寒い中、父と二人で弟を待っていた。しばらくして弟は苦しそうな表情をして、寒風の中走ってきた。弟は私と父の姿を見つけると、今ま

で苦しそうな表情だった顔をキリッとさせ、力強く走り抜けた。その時私は、学校で部活動を指導しているときのように檄を飛ばそうと声を上げたかったのだが、涙がボロボロ出て声にならなかった。何でか分からないけれど、涙が止まらなかった。何人もの選手に抜かれ、前の選手の姿が見えないくらい成績は悪かったが、一生懸命、力一杯走っている弟の姿を見て、あの時ほど感動したことはなかった。そんな弟との関わりのなかで、弟を隠そう隠そうとしていた過去の自分があった。「兄ちゃん、兄ちゃん」と慕ってくる弟を突き放していた自分があったのだ。自分の中に抱いていた世間、『補聴器を付けている弟がいることをみんなが知ったらどんなに思うだろうか。変な目で見られるのではないだろうか』といったことを気にしながら、おびえながら生活していたように思う。自分が障害者と言われる人に対して持っていた意識を、同じようにみんなも持っているのではないだろうかと考えると、『弟と一緒にいるところを他の人に見られたくない。黙っていよう』と思っていた。どんな人にも優しく、温かく接することのできる弟を認めようとせず、反対に負い目とさえ感じさせる意識があった自分が無性に情けない。素晴らしい人間だと心の中では思っていても、それをそのまま表現することができなかった自分を腹立たしく思う。そういう私から出発した部落問題学習の中で、自分の弟が自慢になり、弟のことをみんなに知って欲しいといった思いに駆られ始めた、また、弟を誇りに思えるようになってきた。板野中学校での部落問題学習の取り組みの中で、そういう自分へと意識を変えさせてくれた。自分の中にあるしがらみから自分を解き放すことにより、今までの自分というものが再認識でき、一人ひとりが胸を張って輝きながら生活することの素晴らしさや、何が自分にとって本当の幸せなのか気づかせてくれた。また、仲間と共感し合い、互いに認め合い、支え合うことの大切さを学ぶことができた。

私自身にとってのそういった部落問題学習の素晴らしさに気づかされたのが、全体学習での取り組みからであった。部落問題学習とは、自分を見つめ直すことができ、その自分とその周りにいる人間との関わり、仲間との関わりの中での自分のあり方、人間社会の一人としての生き方とはどういったものであるか、何が自分にとって素晴らしく、生き生きした生き方なのかを考えることのできる学習ではないかと考える。それは、自分の中にある本当の思いを語り合うことにより、もがいている本当の自分の姿を吐き出すことにより気づくものであり、また、自分の周りにいる人間のそういう姿を見て、共感し合う中で、それに気づかされるものであると思う。しかし、自分の胸の中にある重たくのしかかっているものから自分を解放するというのはすごく苦しく、勇気のいることである。まして、学年全体、学校全体の中で、自らをさらけ出すことがどれほど苦しいことか……。自分の奥底にあるものに触れることは、これからの自分が周りの人にどう見られていくのだろうかといった不安感で一杯になる。まさしく自分の中にある世間との闘いではないかと思う。勇気を出して自分を語ってくれる仲間に続きたい。何か言葉を返していきたい。そういった共感する思いが仲間の信頼感をつくっていくだろうし、その中で生まれた連帯感が勇気を振り絞り、苦しい峠を乗り越えていく生徒の生活を支えていくのではないだろうか。また、苦しくうつむく生徒の顔を堂々と上げさせいくのではないだろうか。峠を乗り越えようとしている仲間から勇気をもらい、自分の浅はかさ、情けなさ、自分に対してのはがゆさといったのものに気づき、自分の意識を揺り起こしてくれるのではないかと思う。また、今までの偏見に操られた自分、真実を見ようとしなかった自分、自分以下を求めて満足していた自分、本当の自分を抑え殺し、周りに合わせていた主体性のない自分に気づかされていくのだと思う。私がそうであったように……。自らの解放から自分自身の変革が始まり、差別とはいったい何か、差別を解消

していく主体的な取り組みとは何か、自分が差別解消の主体者としてどう生きていくかを学ばせてくれる。そういった『自分を語る』営みを支えているのが板野中学校での全体学習であると私は思う。学級を越えた学年全体、学校全体の中でこそ、強い連帯感が生まれ、それが多くの生徒の支えとなり、自らの解放の源となっていくのではないだろうか。私が全体学習で与えてもらったものがそうであった。先に述べた弟との関わりを含めた自分と部落問題との関わりがはっきりと私自身の中で見つけられ、やっとそのことが人前で語れたのが学習会での全体学習であった。生徒が切々と自分と部落問題との関わりを、また家庭での部落問題のことをもがき苦しみながら語っていく姿を目の当たりにしたとき、私の中で目覚めるものがあった。何かほっとするような、また震えるような感情が芽生えてきた。『今なら、自分のことしゃべれるような気がする。弟のこと分かってくれそうな気がする。弟のことを誇りに思うことをみんなに語れる。弟のことを今まで隠そうとしていた許せない自分を分かってくれそうな気がする。好きな弟だが、自分にとって苦しいものとしかとらえてなかった自分を語れるような気がする。』そんな気持ちになった。私は生徒に勇気を与えてもらった。また、押し殺した自分の中身を語る喜び、自分のしがらみから解き放たれた喜びを感じさせてもらった。それと同時に、私は今まで何をしてきたのだろうか。何のためにここにいるのだろうか、と考えさせられた。生徒には発言を促してはいるものの自分に関してのことは何も語れず、ただ、その時間を漠然と過ごしていたように思う。生徒を崖から突き落とすようなことしかできなかった自分に気が付いた。この学習は教師という立場で生徒だけに強要させる学習では何の意味もない。生徒と教師が共に一人の人間として部落問題と正面からぶつかり合い、語り合うことができなければ、表面的な希薄な学習になってしまう。教師が自らを語らず生徒だけに強要することは、逆に差別を再生産することにつながるのではないか。差別をなくしていく営みが、反対に差別をつくっていくことになってしまうのではないかと思い始めてきた。》

私自身もこの取り組みの中で、今まで越えることのなかった峠を越えてきた。それは私の父親のことである。父親は私が小学校に入った頃から建設現場で働いていた。

当時、私は父親が「土方」をしていることを恥ずかしいことのように思っていた。小学校の４年や５年のときのことを思い出す。父親と母親が家庭環境調査にある家族の職業欄に、どう書こうかと相談していた姿をはっきり覚えている。

ある年は農業と書いてくれた。家族が食べるだけの米をつくっていたからだった。ある年は運転手と書いてくれた。同じ現場で働く人たちをマイクロバスに乗せて現場に行く。そのことで日給以外に僅かな手当をもらっていたからそう書いたのだろう。

どれもこれも嘘だという意識が私の心の中にあった。でもそう書いてくれることによって私は安心して学校へ行けた。ごまかしていること、嘘を書いていることに対する後ろめたさはあった。私は父親が好きだったのに、将来、父親のようになりたくない。そんな思いでしか父親を見ていなかった。

中学２年のときに、私は友人の言葉から初めて部落を認識したときも「やっぱりそうか」と思った。しかし、クラスの半数が部落の仲間であった中学時代は、部落問題はさほど自分にとって深刻なものではなかった。

それが高校へ進学し、クラスでたった一人になったとき、部落は私に重くのしかかってきた。当時、高校で行なわれた部落問題のロングホームルーム、これほど嫌なものはなかった。なんでこんな無意味な、私の神経を逆なでするようなことをするのかとしか思えなかった。

年に一回、なんの前触れもなく見せられた同和教育の啓発映画、それも本当に嫌なものであった。他のクラスにいた同じ部落から通っている友人が、部落の人間であることを隠そうとして、映画のなにも関係のないところで強がるように笑っていた。その姿を見て、私は部落の仲間の苦しみを肌で感じた。

そんな高校時代を過ごした私は、とにかく故郷を離れることを第一に考えて大学を決定した。それは部落差別から逃げることを意味していた。私は京都で大学生活を過ごすようになった。のびのびとしたい放題の学生生活であった。本当にたくさんの友人ができた。今も京都の地は私にとって大切な場所であり、京都へ行くたび、私が暮らした下宿の方へすぐに足が向く。

それほど、私にとって大切な場所であるのに、私はそこで暮らした４年間、自分が部落出身であることをずっと隠し続けてきた。京都で出会った人のほとんどが私を部落の人間とは知らない。でも、部落差別が厳然と存在する。部落差別を目の当りにしていく中で、私はたまらない思いで息をのみ、自分を殺してきた。

尊敬する人、信頼する人から出る差別の言葉というのはつらいものがある。アルバイト先で私を本当に大事にしてくれたおばさんがいた。こんな人と知り合えて本当によかったと思っていたその人が、ある日私の目の前にさっと４本指を出した。そして「森口さん、あの人はこれでよ」と言った。

私は頭の中でその４本指のことは知っていた。しかし、そのことを目の当りにしたのは初めてであった。震えてきた。必死に平静を装った。なんとも感じないような素振りをしたが、顔はこわばり、言葉をまったく失った。

その夜下宿へ帰り、故郷で生命を削ってまで働き、私を大学まで行かせてくれた父親や母親のことを思った。祖父や祖母のことを思った。こういう差別の中を生きてきたのか、こういうように言われてきたのかと思った。本当にたまらない思いだった。私が私でなくなっていく。このままでは本当にだめになっていく。そんな思いに包まれた。

私は大学の２年から４年まで下鴨で下宿をする。そこでも、本当にすばらしい人と巡り会った。それはその下宿で私たち下宿生の世話をしてくれたおばさんだった。おばさんは洗濯までしてくれた。田舎へ帰るといったら必ず土産まで持たせてくれた。

私の故郷、徳島の父親、母親のことを気遣い、祖父や祖母のことを気遣い、そして「お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんによろしく」と言われる。

その下宿に父も母も祖父も祖母も誰もきたことがないのに、私がただ「父と母と祖父と祖母が田舎にいます」と言っただけなのに、いつも徳島の家族を気遣ってくれたおばさん。心の底から信頼し尊敬し、本当に好きだったおばさん。そのおばさんがあるときそっと言われた。

「森口さん、あの人たちは生まれが違いますからね。かかわらないでね。」

それは部落の青年を指して言われた言葉だった。私は何も言葉を返せず、黙ってうなずいていた。

そのとき私は、母のようにずっと心の底から尊敬しているおばさんにすら、本当の気持ちを偽り、京都を離れていくのかと思った。そして、こんなすばらしい人の中にも部落差別が入り込んでいるということを痛烈に思い知らされた。

私は部落差別の現実を目の当たりにしたことで、故郷へ帰ること、徳島で中学校の教師になることを決意する。京都で部落差別に何度もぶつかったことが、故郷で教師になりたいという思いにさせた。

大学２年、３年、４年とお世話なった下宿を引き払うときに、父親が初めて下宿にやってきた。親戚から１トントラックを借りて荷物を運んでくれた。

その下宿には大学の後輩が２人いた。後輩たちの父親や母親は年に２度、３度、その下宿を訪れていたが、私が下宿を引き払うときに初めて下宿へきた父親の姿は、後輩たちの父親の姿とはまったく違っていた。

厳しい中で働き続けてくれた父親があったから大学を無事卒業することができた。そんな感謝の気持ちでいっぱいなのに、そのときの私は「初めて下宿へくるのだから、ネクタイの１つでも締めてきてくれたら」という思いでしか父親を見られなかった。

父親はその１トントラックの後ろに苗木を３本積んできた。１本はスダチの苗木であり、２本はキンカンの苗木であった。私はそれを見たとき、「なんちゅうかっこ悪いもん、持ってくるんな」と思って、「父ちゃん、これなにするん」と言った。父親は「お前が世話なったお礼に植えさせてもらおうと思うて」と答えた。自分の身体を動かすことを通して、感謝の心を表そうとする本当に父らしい行為でだった。

私は本当はうれしいのに、「父ちゃん、ありがとう」と言いたいのに、その言葉が出てこない。「こんなお礼の仕方しか浮かばんのか、もっと気のきいた礼の仕方があるだろう」と思う自分がだった。

父親は一生懸命、３本の苗木をおばさんの住んでいる庭先に植えていく。土にまみれて植えていく。私は父親にずっと感謝の気持ちを持ちながらも、父親のその心をどうしても素直に受け入れることができなかった。

私の心の底にあった部落への差別意識が、私自身を苦しめ自分を見失わせて、当時の私を支配し、父親の行為を恥ずかしがらせていた。

かつて私は妻にすら父親の仕事を明らかにしなかった。２人で結婚の約束をしてしばらくした頃だったと思う。妻は「お父さんはどんな仕事をしているの？」と聞いた。でもそのとき私は答えなかった。私は怒ったように「一生懸命働っきょる」と言った。答えになっていない。しかし、それは私の精一杯の言葉だった。妻はそれ以上何も聞かなかった。

私の中にあった差別意識が、被差別部落に圧倒的に多かった父の仕事を恥ずかしがらせていた。しかし、この部落問題学習への取り組みによって、私の父親に対する思いは変わってきた。

私は今も、結婚したとき、子どもができたとき、また子どもの成長を確かめるように、人生の節目節目にその下宿を訪れる。その度におばさんが言ってくれる言葉がある。

「森口さん、お父さんが植えてくれたキンカンは、実がしっかりついています。でも、スダチはなかなか花が咲きませんね。あの木を見るたびに森口さんがおいでた頃を思い出すんですよ。」

おばさんがしみじみと語ってくれるスダチの苗木とキンカンの苗木。父親があの苗木を植えてもう１３年が経過する。

私はそのことを今、心の底から感謝できるようになり、「父ちゃんありがとう」と言える自分になれたことが、部落問題学習に取り組んできた大きなの喜びである。

私はこの思いを１９９２年度の同和教育の実践記録としてまとめた『よろこび』２号の一番最初に「スダチの苗木とキンカンの苗木」としてまとめた。

かつてだれにも語らなかったことを恥ずかしいとさえ思ったことを誇らしいものとして私は書いた。その冊子が仕上がったときに、私は父親にその冊子を見せた。

数日後「父ちゃんあの本読んでくれた？」と言ったら父親は顔を真っ赤にした。そのとき父親

はつぶやくように言ってくれた。
「お前のような先生がおったら、お前のクラスの部落の子はうれしかろうな・・・・・・。」
その言葉がたまらなくありがたかった。
それ以後、私は毎年出会う生徒たちに、わが生い立ちを堂々と語ってきた。そんな私の生きざまが、生徒たちの生き方を揺さぶっていく。１９９３年度、全国で封切られ、昨日の夜（全同教徳島大会の前夜）、テレビでも放送していた山田洋次監督の「学校」という映画を全校で鑑賞したとき、生徒たちの訴えによって翌日、クラス全体で映画のテーマについて話し合いがもたれた。
その授業の冒頭、田中邦衛という役者が演じていた猪田幸男、「イノさん」に寄せて語った生徒の発言は、クラス全体を大きく揺さぶり、その授業をより感動的なものにしていった。それは次のような発言だった。
《字を書けない人が一生懸命字を覚えていたところがあったけど、あの人の姿と僕の父ちゃんがダブってくるんです。僕の父さんもあんな感じだったんかなあと思えてたまりませんでした。
小学校のとき宿題を教えてもらおうとしたことがよくあったけど、あのときの父さんは苦しかっただろうなあと思うんです。
今でもはっきりと覚えているのが、算数の宿題を教えてもらって、その次の日、学校にその宿題を持っていって答え合わせをしたんです。そうしたら全部間違っていた・・・・。僕はそのとき父さん、あかんなと思ったんです。
でも、昨日あの映画を見て父さんのこと思ったら涙が出そうになった。わからないのに一生懸命に僕のことを思って教えてくれた気持ちがものすごくわかるんです。僕はほんまに一生懸命に勉強して父さんを幸せにできる人間になりたいと思います。》
同和教育は、価値観を根本から変えていく。私たち自身を解放していく営みだと思う。こだわり怖れおびえ、そういう自分の中にあった真っ黒い差別の塊である部分、そういうものを解き放っていく。同和教育は教育そのものであり、まさしく教育の中核であると思う。

3　燃え続けるエネルギー～部落解放の主体者として～

私たちは毎年、全体学習や公開授業の授業記録を中心に、同和教育の実践記録として「峠を越えて」をまとめてきた。毎年毎年繰り返されてきた実践のまとめが、私たち一人一人の大きな力となってきた。４冊目となった１９９３年度の実践記録「峠を越えて」は、４２４頁に及ぶ膨大な記録となった。
この春休み、編集にほとんどの日々が費やされた。深夜に及ぶ作業の繰り返しで身体はガタガタになったが、心はいつも熱いものがあった。
この実践記録は、共に授業に取り組んだ生徒たちのもとに届けることができた。進学先や実社会での新しい生活のスタートを切ったばかりの生徒たちが、４月末に仕上がった「峠を越えて」を手に取り、１つ１つの授業での発言を思い出し、その授業の場面に思いを馳せる姿に、編集の苦労が吹っ飛び、心が洗われる思いだった。「峠を越えて」について生徒たちから多くの思いが寄せられた。その１つ１つが私たちの支えとなっている。
特に、実社会に出て将来理容師として自立することを目指して、理容店で働いているＡ子から届けられた手紙は、部落差別の現実と私たちの生き方を問い続けている。
《先生、先日はわざわざ「峠を越えて」を届けてくれてありがとう。１つ１つの授業、みんなの

言葉、先生たちの思い、毎晩のように大切に読んでいます。

実は私、ずっと悩んでいたことがあったんです。いつもよくきてくれているお客様に話しかけられたんです。

「おまはん、どこに住んどん？」って聞かれて、「Ｓです」って答えて、「Ｓのどこ？」って聞かれたので、「Ｋです」って言ったら、それから話をしてくれないんです。

２月に散髪にきたときにそう言われて、３月にまた散髪にきたときよそよそしい態度をとられました。４月にきたときは私がシャンプーをした後で、「何か油をつけときましょうか？」「セットしときましょうか？」って聞いたとき、答えてくれませんでした。

３月、４月と差別されているというか、無視されているんです。こういう職業はお客様と交流＝話をすることが大事なのに、嫌われていて悩んでいたんです。もう泣きたいくらいつらかったんです。何も答えてくれない。ただそれだけのことなのに、たまらなくつらかったんです。

でも私は、今まで板野中学校で学んだことを頭の中においてなく忘れていたことに気がつきました。今度あのお客様がきたとき、どうしようと思っていたけど、「峠を越えて」を読んで、勇気と元気がわいてきました。

板野中学校での「輝ける日々」。体育館で流した涙。納得いくまで語り合った全体学習。怒りに震えた森口先生の言葉‥‥。忘れていたものがどんどんよみがえってきました。ぐっとくるものがありました。本当の意味での「輝ける日々」が今再びスタートしようとしています。私は私に誇りと自信を持って頑張ります。

この「峠を越えて」を読んで、山口先生、吉成先生、中山先生、豊田先生、森口先生、柴田先生、岩佐先生、岡田先生、榎村先生、赤澤先生、山尾先生、板東先生、友成先生、阿部先生、富加見先生に「お前は何をしよるんな」「お前に今何ができるかを求めて頑張れ」って言われたような気がします。私に新たな気持ちを持つように初心に返るようにアドバイスをくれた先生方にお礼を言いたいです。「先生、ありがとうございました。」私はくじけず頑張ります。先生たちも部落問題学習に全力疾走してください。》

１５歳にして、部落差別の現実にさらされ苦しんでいる。この現実に怒りがこみあげてくる。そして何より、Ａ子が手紙の中に共に全体学習に取り組んだすべての先生方の名前を綴った気持ちが伝わってくる。Ａ子にかかわったすべての教師が、自分のすべてをぶつけて部落問題学習に全力疾走することがＡ子の支えになっていくと信じる。

私たちを燃やし、今も生徒たちを励まし続ける授業実践の記録「峠を越えて」には、全体学習で取り組んだ「私の目をみて！」や「自分以下を求める心」「意識の芽ばえ」の授業記録。また、進路公開や先ほど紹介した映画「学校」の授業記録。学級全員が取り組んだ人権劇のシナリオ。そして、この学習に取り組んだ教師の願いが刻まれている。

この「峠を越えて」は、この全体会場及び分科会会場に展示している。多くの皆さんに読んでいただき、私たち教師や生徒の思いに触れていただきたいし、思いを同じくする中学生や高校生にも是非読んでいただきたいと思っている。

私たちは部落解放への営みをより確かなものにし、この全体学習という取り組みが、多くの学校に広げていくことを願って、常に全体学習は他校の先生方にも公開してきた。多くの先生方が参観した全体学習、その翌日に提出されたＮ夫の生活記録は、私たちの思いを象徴するものである。Ｎ夫の生活記録を紹介する。

《部落問題学習でつかんだもの、それは３年Ｂ組という固い団結の絆だと思う。一人一人の悲し

みが怒りとなって語り合い、そして支え合っている。

全体学習が終わったとき、男の先生が僕のところにきて、「頑張ったなあ」とか「よかった」とかいうようなことを言ってくれた。僕はものすごくうれしかった。発表して本当によかったと思った。この先生だけでなくほとんどの先生たちが、この学習の大切さをわかってくれたと思う。

この３年Ｂ組で、この３年生で、そしてこの板野中学校で燃やしたこの炎を多くの先生たちが、また誰かにつないでくれたらと思う。

自分の思いを語っていくことによって自分という人間が変わったと思う。２年生に比べて明るくなったと思うし、物事をよく見るようになった。

そして、朝がさわやかに感じられ、人の優しさというものが見えてきたと思う。今日帰るときコスモスの花が太陽に照らされていた。まるで僕に勇気をくれているような気がした。

過去を背負うのではなく未来に希望を持ちながら頑張っていきたいと思う。これからも悲しさではなくうれしさで、そして嘆くよりも怒る気持ちで、これからも峠を越えていきたいと思う。支え支えられてこれからも自分というものを見つめて頑張っていこうと思う。

今日帰るとき、女の先生から声をかけられた。「授業、感動しました」と言ってくれた。僕は「学校に帰ってからも同和教育頑張ってください」と言った。後でもっといろいろな話をしたらよかったと思った。でも多くの人の心が動いてくれたことがうれしい。こう言ってくれる人たちは学校に帰っても頑張ってくれると思う。僕も人任せにならないように頑張っていくつもりです。

果てしない、そして長い道のりをこれからも光をたっぷり浴び、空気を思いきり吸って、仲間と共に歩み、足踏みすることがあっても、弱音を吐かず、希望のゴールへと進む。》

私は１０年ほど前、高知で開かれた全国部落出身教職員の会に参加したとき、奈良の仲間が提出してくれた資料を通して、「よろこび」という詩にめぐり合った。その晩宿舎に帰って、「よろこび」の詩の入った資料を開き、体中からほとばしるような喜びをかみしめながら、持っていた手帳に一字一字を心に刻みつけるように記していった。それ以来、新しい年の始め、新しい手帳に「よろこび」の詩を刻み続けている。私の宝物であり、今も私を支え続けている詩「よろこび」を報告のまとめとして紹介する。

『よろこび』

部落で生まれ、
部落で育ち、
部落でくらし、
運動と教育にいのちをかけて六十年。

或るときは、烈火の叫びとなり、
或るときは、草にすだく虫の声となり、
或るときは、差別の事実に迫り、
或るときは、静かに差別の矛盾を訴えた。

このみちは、きびしい荊の道なれど、
この道はわが生涯のつとめなり、

ゆくさきは、幾多迫害ありとても、
この営みは、わが終生の、運命なり。

しかして、この営みは、
わが生命の生きがいにして、
わが生命のよろこびなり。

（西口敏夫先生著・詩集「水平社宣言讃歌」より）

1991年度徳島県中学校
同和教育研究大会公開授業（193頁）

1991年度徳島県中学校同和教育研究大会公開授業（193頁）

第25回全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業（177頁）